

## ■ 書 評



### 薬物依存とアディクション 精神医学

松本俊彦 著  
金剛出版 2012年2月  
248頁, 定価 3,780円

今日、薬物乱用問題は、全世界的な広がりを見せており、日本国内においても、「第三次覚せい剤乱用期」といわれる深刻な情勢が続いている。このような厳しい乱用状況を早期に終息させるため、政府、厚生労働省は「第三次薬物乱用防止5か年戦略」に基づき各種対策を講じている。

ひるがえって、精神医学の領域において、物質依存は、日常臨床でも出会うことが非常に多い疾患領域の1つであり、日本精神神経学会専門医研修制度においても、経験症例2例以上、症例レポート1例以上が要求されている。しかし、この領域の精神障害に対して、苦手意識を持つ精神科医療関係者は意外に多いのではないだろうか。

本書は、そういった精神科医療関係者に向けて、「アディクション臨床の深さと面白さ」を知ってもらいたいと切望する著者による、薬物依存についての著作集である。

著者の前著である「薬物依存の理解と援助」(金剛出版2005)は、大学卒業4年目に、薬物依存専門治療施設に赴任した著者が、薬物依存者との出会いの中で、悩んだり戸惑ったりし、実務上のやむにやまれぬ要請から始めた研究の成果を、大学に戻り、さらに司法関連の研究所に異動してから一冊に編んだ論文集であった。前著出版後、著者は、医療観察法の入院病棟におけるアルコール・薬物依存治療プログラムの立ち上げに関わったことがきっかけとなり、一般精神科医療における薬物依存治療プログラムの開発と普及にも携わることとなった。また、著者はその後自殺予防関連のセンターに異動したため、アルコールや向精神薬の乱用と自殺の関連も研究テーマとすることになった。こうして、前著出版後の6年あまりの間に、「視野が大きく開け、語るべきことが一気にわき出て」、著者は多くの薬物依存関連の論文を発表することとなったのだが、

そうした論文14編に書き下ろしの3編を合わせて出版されたのが、本著作集である。

第1章では、「否認の病」といわれる依存症について、むしろ問題点を見いださないように否認しているのは医療者の方ではないのかという問題提起がなされている。続く第2章においては、DSM-5ドラフトまで視野に入れながら、依存症概念の今日的意義について歴史的展望がなされている。第3章、第4章において、依存症臨床における初回面接、インテークの具体的方法が述べられた後、第5章において、薬物依存に対する治療プログラムに関して、アメリカのMatrix研究所の開発したMatrix model、そしてそれに範をとって著者らの開発した薬物依存治療プログラムであるSMARPP (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program)を中心に詳述されており、薬物依存者、特に覚せい剤依存者との関わり方について、司法的対応よりも治療的対応に立つべきとする著者の考え方が述べられている。SMARPPについては、すでに著者らにより、当事者のためのワークブック(「薬物・アルコール依存症からの回復支援ワークブック」金剛出版2011)が刊行されているので、SMARPPのプログラムの具体的な内容を知りたい読者はぜひ参照して頂きたい。

第6章以降においては、思春期における薬物乱用、アディクションに見られる衝動性と攻撃性、薬物依存臨床における司法的問題への対応といった興味深いテーマが語られているが、そのなかでも今日的かつ重要なテーマを扱っていると思われるのは、第11章の「精神科治療薬の乱用・依存—医原性の薬物依存—」であろう。著者は、1987年以降、全国の精神科病床を有する医療機関に対して行われている薬物関連精神疾患の実態調査をもとに、2010年には乱用薬物の第2位が鎮静薬(睡眠薬・抗不安薬)となったと指摘し、医療のなかで生じた薬物依存を医療が責任をもって回復すべきであると主張している。さらに第16章の「アルコール・薬物依存と自殺予防」において、著者は、アルコール・薬物の乱用・依存と自殺との関連について概説し、その知見にもとづいて、今後わが国の自殺対策の文脈のなかで何が課題になるかについて私見を提示している。

本書で著者が論じている問題のいくつかは、薬物依存治療の専門家の中でも議論がわかれるものであろうし、本書が「決して薬物依存者支援の教科書でないし、治療マニュアルでもガイドラインでもない」ことは著者自身「はじめに」で述べておられる。しかし、本書に薬物依存臨床のために有用な情報や考え方が豊富に含まれていることは確かであり、広範な読者に一読を勧めたい一冊である。(小原 圭司)